「湖南こんなとこなんじょ」第５号　古城長沙と三国名将関羽

湖南省は自然に恵まれ美しい風景がたくさんあるばかりでなく、歴史も古くて名所旧跡もとても多いところです。前の号では、山水画のような奇岩絶景を有し、世界中から注目を浴びている「張家界武陵源」、及び中国で最も美しい町並みと言われる少数民族の町、「鳳凰古城」をご紹介させていただきました。今回は、湖南省の省都である長沙についてご紹介します。ぜひ古城長沙（ちょうさ）の歴史、文化や名勝旧跡を知っていただくと同時に、そのゆかりの人物、三国時代の蜀の名将である「関羽（かんう）」の逸話もお楽しみください。

長沙市の概要：

（橘子洲（ジュズゥー）の全貌①）

長沙は湖南省の東部、湘江下流にある湘瀏（シャンリュウ）盆地の西に位置しており、湖南省の省都で、省の政治、経済、文化、科学技術教育、商業と貿易の中心として、全国両型社会②建設総合支援改革試験区の中核市でもあります。長沙には、芙蓉、天心、岳麓、開福、雨花、望城という六つの区域、及び長沙県、寧郷市、瀏陽市という三つの県（県級市）があります。また、長沙ハイテク区、長沙経済開発区、寧郷経済開発区、瀏陽経済開発区、望城経済開発区など、五つの国家レベル開発区と九つの省レベル産業団地を有しています。

長沙市は、昔「潭州（たんしゅう）」また「星城」とも呼ばれてきました。その地理の特徴と歴史のゆかりで、「山水洲城」「屈賈之郷」という美名を持ち、岳麓書院の関係で「瀟湘洙泗（シアオシャンズゥスィ）③」と

---

①出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

②中国では、今推進されている「省エネルギー型社会」と「環境に優しい型社会」の略。

③「洙泗」は今山東省にある二つの川のことを指す。川の間に昔孔子が門下生を集めて講学していた所があったため、「洙泗」は孔子と孟子を代表とした儒家文化の別称ともいう。ここでは、湖南湘江地域は、儒家文化の倫理と精神を輝かせて、孔子と孟子の理念と学術伝統を受け継いできた場所だと意味する。

いう美名もあります。長沙は株洲市・湘潭市とともに、中国の製造業の中心の一つである「長株潭都市群」を構成し、国家総合支援改革試験区でもあります。長沙は中国中部重要な中核市であり、全国総合的な交通要衝と中国第一期歴史文化名城でもあります。

（長沙市人民政府ホームページによる作成）

長沙は山水が美しく人材が輩出する文化名城であり、三千年もの歳月を経ても城址が変わったことはありません。ここには、馬王堆漢墓（マワンデゥーハンムー）、四羊方尊、三国呉簡、岳麓（がくろく）書院、銅官窯[①]（銅官焼き窯）などたくさんの文化財が残っています。雄壮な岳麓山が西にそびえ、湘江の水は悠々と流れ、橘子洲は景勝地として生まれ変わり、大圍山（ダァーウェーシァン）や灰湯（フェータン）温泉などが散在しており、山、水、洲、城はここに集まって一体となっています。

産業：

長沙市は中国中南部における重要な商業都市であり、経済は工業、サービス業を中心に、娯楽産業、マスコミ、映画製作、バラエティー番組製作なども全国的に有名です。近年、ハイテク技術産業、電子産業もめざましい発展を遂げています。三菱自動車、住友商事、平和堂などたくさんの日系企業も進出しています。

歴史：

長沙市は楚漢（そかん）文明の発祥地で、三千年の歳月を経ても名前および場所が一度も変わったことはありません。長沙市には、馬王堆漢墓・岳麓書院・四羊方尊・走馬楼（ズォーマロー）書簡などの重

[①]長沙市望城区銅官鎮にある、陶器を焼く窯の遺跡。中国唐代の彩陶器の発祥地でもある。

要歴史文化財及び名所旧跡が残っており、濃厚な楚漢文化と湖湘文化を強く映し出しています。屈原・賈誼・杜甫などの有名詩人は長沙を詠い、今日まで伝わっている数々の優秀な詩文を創り出しました。また、毛沢東・劉少奇などの優秀な近代政治家も輩出しています。

長沙は三国時代に東呉[①]の領地であり、「長沙郡」と名付けられていました。湘江東部の地域を管轄していましたが、荊州[②]に属し、下に県・郷・里が設置されていました。190 年（初平元年）に、関東諸侯は董卓を討伐するために兵を挙げましたが、長沙太守孫堅も兵を率いて合流しました。このことから、長沙は東呉孫家発足の地としても知られていました。

特産品：

（長沙三絶[③]：湘繍、中国紅陶磁器と菊花石彫り）

この地で収穫されるお茶は「湘茶」と名付けられ、世界にもその名を馳せる貴重なお茶で、口当たりがいいのが特徴です。ほかには、「湘繍[④]」、「中国紅陶磁器[⑤]」、「菊花石彫り[⑥]」が有名で、「長沙三絶」と呼ばれています。また、「瀏陽トウチ（豆豉）」、「瀏陽花火」、「羽毛製品」、「長沙ビーフン」なども有名な特産品です。

観光：

長沙市は美しい自然景色に恵まれ、観光資源も豊かで観光名所が数多くあります。長沙は季節ごとに見所がたくさんありますが、秋が最高の旅行シーズンで、一番の見所は紅葉です。特に岳麓山の紅葉が美しく、毎年多くの観光客が訪れます。

[①]中国三国時代の国。孫権が中国の南東部に立てた政権で、国号は「呉」。国が三国の東部に位置したため、「東呉」ともいう。

[②]中国の歴史的な州の一つ。現在の湖北省一帯に置かれた。

[③]出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

[④]長沙市の特産品、中国四大刺繍の一つ。もともとは湖南の民間刺繍だったが、蘇州刺繍と広東刺繍の特長を取り入れて発展してきた。2000 年余りの歴史を有する。

[⑤]千年前の唐代の長沙窯で大量に作られた陶磁器で、世界の彩釉薬、特に紅釉薬の始祖ともいわれる。陶磁器の英語は「China」なので、中国紅陶磁器の英語は「ChineseRed」となり、「中国紅」ともいう。

[⑥]湖南瀏陽県の伝統工芸品。2 億年前の菊花石を使って加工した彫刻であり、中国三大石彫の一つ。

悠久の歴史、輝かしい古代文明や素晴らしい自然に恵まれている長沙市は、風光明媚な土地です。特に岳麓書院、馬王堆漢墓、開福古寺、天心閣などの名所旧跡や、岳麓山、烈士公園、橘子洲などの文化観光スポットはとても有名です。

岳麓山：

岳麓山は長沙市内、湘江の西岸に位置しています。最高峰である雲麓峰は「霊麓峰」とも呼ばれ、標高 300m、南岳衡山七十二峰の一つです。南朝の劉宋代（420−479）が書いた『南岳記』によると、岳麓山の名前は、「南岳は周囲八百里、回雁[①]を首と為し、岳麓を足と為す」という文から由来しているようです。

（岳麓山の全貌[②]）

岳麓山は 1975 年に岳麓山公園に開発されて、今長沙市街地の一部となっています。2002 年、国務院に「国家重点風景名勝区」と指定されました。岳麓山は古城である長沙に隣接しているため、昔から多くの文人墨客が魅了されて止まない場所です。麓にある岳麓書院は千年以上の歴史を有し、中国宋代四大書院[③]のうち、最も有名な学府であり、多くの才能豊かな人材を育ててきました。岳麓山は樹木の生い茂る山々と美しい渓谷をもって知られ、愛晩亭、岳麓書院、麓山寺、雲麓宮、白鶴泉、禹王碑、二南詩刻、隋舎利塔など省レベル以上の重要文化財だけで 15 ヵ所あります。また、黄興、蔡鍔などの近代革命家はここに永眠しています。

[①]回雁峰のこと。長さ約 400 キロの南岳衡山七十二峰の一つ、「南岳第一峰」ともいう。

[②]出所：http://cs.bendibao.com/tour/2015924/44769.shtm

[③]「四大書院」の言い方は唐代から始まった。それぞれ、応天書院（現在河南省商丘市睢陽南湖畔）、岳麓書院（現在湖南省長沙市岳麓山）、白鹿洞書院（現在江西省九江市廬山）と嵩陽書院（現在河南省鄭州市登封嵩山）のこと。

長沙最古の寺院である麓山寺は岳麓山の中腹にあり、「漢魏最初の名勝、湖湘第一の道場」といわれます。境内の観音閣前にある 2 本の羅漢松は「松関[①]」といい、境内後方の古樹に抱かれた石の隙間から泉が流れ出ています。冬も夏も枯れることなく、「白鶴泉」と呼ばれています。

岳麓山雲麓峰にある「禹王碑」は岳麓山の歴史ある文化の象徴です。宋代に復刻されたこの碑は中国最古の石刻で、珍しい篆書文で 9 行 77 文字が刻まれています。伝説によれば、この碑は 4000 年前の夏禹遺跡にある石碑にちなんだもので、碑文の記述と歌は大禹の治水[②]の功績を讃えるものです。大禹が南岳を訪れた際、岣嶁峰にこの石碑を建てたと伝えられています。

愛晩亭：

(愛晩亭の秋景色[③])

愛晩亭は岳麓山清風峡にあり、中国四大名亭の一つであり、岳麓山風景名勝区の有名な観光スポットです。清代乾隆 57 年（1792 年）に建て始めた愛晩亭は、岳麓書院の院長であった羅典によって名付けられ、最初は「紅葉亭」「愛楓亭」と呼ばれていました。その後、袁枚は唐代詩人杜牧が詠った「車を停めて坐に愛す楓林の晩、霜葉は二月の花より紅なり」にちなんで「愛晩亭」と名付けました。現存する「愛晩亭」の題額は 1952 年に建て直した際に毛沢東が書いたものであり、亭内には「沁園春・長沙」という詩歌の横額がかけてあ

[①]閣の前に立ち並んだ二本の古い松は堅固な関所のようなものなので、「松関」ともいう。

[②]中国の昔の神話伝説。三皇五帝の時期、黄河がよく氾濫していたため、黄帝の子孫である大禹は治水の命を受け、民衆を率いて 13 年間もかかって洪水と戦った結果、見事に退治したという。

[③]出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

ります。清風峡という小さな山の斜面にあります。八つの柱に支えられていた二重構造の四角亭が楓に囲まれて、春は葉っぱが青々と茂り、夏は日陰で涼しくなり、晩秋は紅葉が鮮やかな赤に染まり、格別の趣に包まれます。

岳麓書院：

岳麓書院は美しい岳麓山の麓に位置し、湖南大学の構内にあります。中国四大書院の一つとされ、中国に現存する中では規模が最も大きく、よく保存されている古代書院建築です。千年学府とも呼ばれています。1988 年には全国重要文化財に指定されました。

（岳麓書院の正門[①]）

岳麓書院は北宋時代の 976 年、潭州太守[②]の朱洞（シュドウ）によって創設されました。宋代から清末まで昔の高等教育機関でありつづけてきました。1903 年に湖南高等学堂に改名され、のちに湖南高等師範学校、湖南公立工業専門学校、1926 年に正式に湖南大学と改名されました。岳麓書院は中国文化教育事業の長い歴史を語る貴重な文化史跡であります。1980 年代から湖南大学による管理と修繕がされて以来、岳麓書院は千年にわたった教育理念と学術研究の伝統を受け継いで、書院の伝統的な役割を果たしながら輝かせるシンボルとなりました。

岳麓書院は幾度の戦火を被り、7 回も壊されたり建て直されたりしてきました。現存するのは清代に残っていた建物に基づいて建て直されたものです。書院の敷地面積は 21,000 ㎡で、全体的なレイアウトは中軸に沿う左右対称の形で、奥深い立体感のある庭園式の建築です。主な建物、前門（大門）、二門、講堂、半学斎、教学斎、百泉軒、御書楼、湘水校経堂、文廟などが中軸にあり、講義、蔵書、祭祀としての役割を果たしていました。両側には、食堂、寮、祭祀の祠などがあります。荘厳、神秘、奥深い雰囲気や視覚効果を醸し出すだけでなく、上下尊卑の秩序関係や主従関係がハッキリしている社会倫理を唱える儒家文化を現すことで、中国の古代書院建築の雄大さと荘厳さを再現しています。

[①]出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

[②]中国の秦代から漢代まで、郡の長官。

また、書院の大門には「岳麓書院」の横額と、両脇には「惟楚有材、於斯為盛（惟だ楚に材有り、斯に於いて盛為り）」の縦額があります。ほかに、清代康熙帝、乾隆帝がそれぞれ書いた「学達性天」、「道南正脉」の額、朱熹の筆による「忠孝廉節」四文字の石刻などが残っています。

天心閣：

天心閣は長沙市の南東部の城南路と天心路が交わるところに位置しています。古城長沙のシンボルといわれ、長沙の重要文化財でもあります。昔は「天星閣」と呼ばれていたのは、明代に流行っていた「星野[①]」という説からです。星宿によって野が分けられて、天心閣の場所は空にある「長沙星」の位置と一致することから、「天星閣」と名付けられました。また、古閣は古城長沙の最も高い場所である龍伏山の頂にあり、昔から「瀟湘古閣、秦漢名城」という美名を持っており、風水の宝地として、天文観測や天神を祭る場所として使われてきました。長沙の文化繁栄を願って、楼閣内には文昌帝君[②]と魁星の像が祀られています。

（天心閣[③]）

天心閣は明代に建てられ、清代乾隆帝の時期に修復されましたが、1938 年の「文夕大火[④]」で焼き尽くされ、1983 年に再建されました。新しい楼は、主閣の元の様相を保っているだけでなく、さらに古岳陽楼を参照して、二階建ての輔閣を二軒増やし、まるで二つの翼が

[①]中国の昔、漢民族の星への自然崇拝。空にある二十八の星宿から、地上の州と国を十二の地域に分けて、それぞれ対応させた。また、星回りを観察して対応する地域の吉凶を占っていた。

[②]中国では、昔から知識人の間で信仰された学問や科挙の神、俗に魁星（けいせい）と称される。また、文昌は北斗七星の第 4 星の名で、文曲ともいう。

[③]出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

[④]1938 年 11 月 13 日深夜、長沙で発生した大規模火災のこと。

ある伝説の鳳凰のようです。三軒の閣は廊下でつながって一体化となり、32mの凹状の部分の上にある楼閣がさらに壮大さを増していて、高さ 17.5m、60 本の木の柱に支えられています。主閣と輔閣は花崗岩などの高級石材でできており、獅子、瓢箪、梅、竹、蓮、車、馬、龍などが生き生きと彫刻されており、趣があり形もユニークです。

楼閣は古城の壁及び天心公園、ほかの建物とうまく融合しています。楼閣は城の一番高い所にあり、しかも 30m以上の城垣の上に建てられています。近くには妙高峰(みょうこうほう)が連なっており、遠くまで眺めると、岳麓山がいっそう高く美しく見えます。天心閣は城内で最も高いところにあるため、そこに登ると、長沙城のすべてを余すことなく見渡せ、心がゆったりして気持ちもよくなります。

湖南省博物館：

(湖南省博物館[①])

湖南省博物館は長沙市開福区に位置し、1951 年に建てられ、1956 年に開館した湖南省立歴史・文化・芸術博物館です。敷地面積は 51,000 ㎡、建築面積は 29,000 ㎡で、湖南省 AAAA レベル観光地と認定され、第一期国家一級博物館であり、八つの国家レベル重点博物館の一つでもあります。

博物館の収蔵品は 18 万点以上、そのうち、一級文物（文化財）の収蔵品は 763 点もあります。中には、新石器時代の石器や陶磁器、殷(いん)（商）・周の時代の青銅器、戦国時代の楚の

[①]出所：湖南省旅行局オフィシャルサイト

文物、馬王堆漢墓の出土文物、後漢時代から隋唐時代までの湘陰窯[①]と岳州窯[②]の青陶磁、唐代・五代の長沙窯[③]の下絵付き陶磁器、唐代に書き写された王羲之の『蘭亭序』の本、明末・清代初期の思想家王夫之の筆跡などがあります。その他、太平天国及び湖南農民運動に関連する文物も多く収蔵されています。

それらの収蔵品を輝かせ、文化財の魅力を十分に見出すために、博物館は現代的な陳列手法を取り入れて、「長沙馬王堆漢墓陳列シリーズ」と「湖南人――三湘歴史文化陳列シリーズ」という二つの常設展示館、また青銅、陶磁器、書画、工芸といった四つの特別テーマ展示館を設けています。

（T 型帛画（一部）[④]）

（素沙禅衣[⑤]）

また珍品として、大禾人面紋の方鼎[⑥]や象紋の大鐃（ドラ）などの殷の青銅器、長沙馬王堆の三つの漢墓から出土された彩帛画[⑦]、竹簡、漆器、楽器、彩色の棺など 3,000 点以上の

[①]湖南湘陰県にある陶器を焼く窯。隋代から始まり、唐代に全盛期を迎え、五代に衰えた。青陶磁器がメインで、唐代六大青陶磁器の産地の一つ。

[②]湖南湘陰県にある。東漢時代から始まり、西晋・南朝・隋を経て、唐代まで続いていた。中国史上最初の青陶磁器を焼く窯でもある。

[③]銅官窯のこと。

[④]出所：湖南省博物館ホームページ

[⑤]出所：湖南省博物館ホームページ

[⑥]商代末期の青銅器。中国全土唯一の、人間の顔の模様で飾られた鼎である。高さ 38.5 ㎝、長さ 29.8 ㎝、幅 23.7 ㎝。湖南省博物館所蔵。

[⑦]中国の古代絵画の一つ。帛という糸で作られた白い織物に、墨や多彩な塗料を使って人間、獣、鳥、神や怪獣などを描いた作品である。一番有名なのは湖南省博物館に収蔵されている「T 型帛画」である。

貴重文物と女性の湿屍（ミイラ）があります。その女性ミイラとともに出土された「素沙禅（単）衣」は蝉の羽のように軽く、長さ約 1.28mもありながら、その重さはわずか 50 グラムにも及びません。その精巧極まりない手工芸には思わず賛嘆の声が出てしまいます。

ゆかりの人物～三国名将関羽～

（関羽のイメージイラスト①）

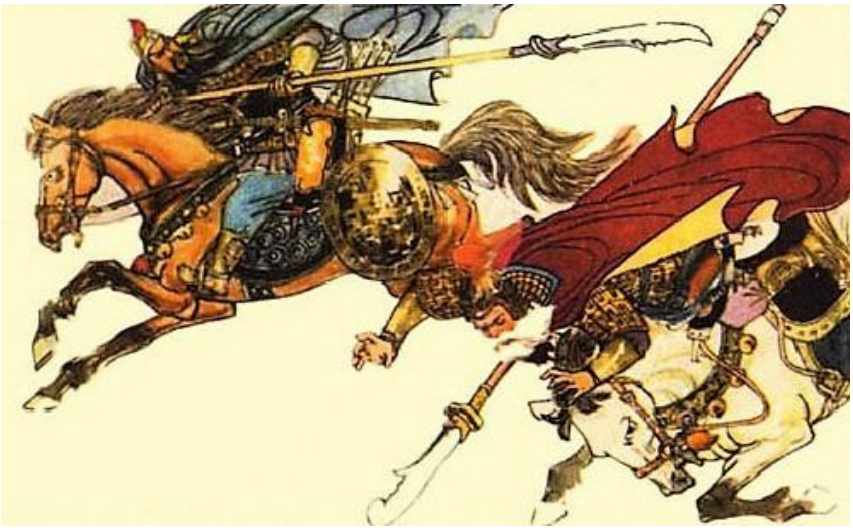
関羽は名高い武将であったことから昔から武神として、また関羽が義理や信義に厚い人物だったこと、もともと塩の密売業者で算盤や大福帳を発明したという伝説から現在は主に商業の神様として信仰されています。長沙の人は特に関羽を尊重し崇拝しており、昔から「関帝②」を祭る慣習があります。

東漢建安 12 年（208 年）、赤壁の戦いの後、劉備は武陵・長沙・桂陽・零陵といった荊州南部の四郡へ出兵しました。主命を受けた関羽が長沙へ侵攻をかけました。そのため、長沙にはその戦いに纏わる地名や伝説がたくさん残っています。

---

①出所：百度百科

②関羽が神格化されたもので、関羽の敬称でもある。



（関羽と黄忠の一騎討ちのイラスト[①]）

長沙太守韓玄（カンゲン）は配下の黄忠（コウチュウ）に関羽を迎え撃たせました。黄忠と関羽の一騎討ちの最中、黄忠の馬が足を折ってしまったため、黄忠は絶体絶命の危機に陥りました。しかし、関羽はこれを斬ることをよしとせず、黄忠を見逃しました。一方、韓玄は黄忠に関羽を射殺せと命じたが、黄忠は主命と恩義の板挟みとなって苦しんでいました。翌日、わざと関羽の兜の付け根を狙って矢を射て、恩を返しました。これを見た韓玄は黄忠を疑い処刑しようとしました。その時、韓玄のもとに身を寄せていた魏延（ギエン）が民衆を扇動し反乱を起こして、韓玄を討ちました。その後、黄忠は家に閉じこもりましたが、劉備が自ら訪ねてきたため、その意気に感銘して出仕しました。

関羽は、駱駝嘴（ロオートゥズェー）という瀏陽河と湘江の合流点より長沙に入りましたが、そこで青龍偃月刀（せいりゅうえんげつとう）を川に落としてしまいました。刀に刻まれている青龍は水に浸かって直ちに生き返り、刀と一緒に湘江をさかのぼり、3.5 キロメートル離れた撈塘河（ラオータァンヘェー）でやっと見つかったという。その後、駱駝嘴は「落刀嘴（ロオーダァオズェー）」と、撈塘河は「撈刀河（ラォーダァオヘェー）」と、名前が変わりました。

他にも長沙には「吊馬庄（ディオマズゥン）」や「跳馬澗（ティオマジェン）」など、関羽ゆかりの地名があります。「吊馬庄」は現在の天心区磨盆湾（まぼんわん）の北側にあり、関羽が長沙に入城した後、そこで馬を木につないだことから名付けられました。また、「跳馬澗」は長沙県飛馬郷（ひばごう）にあります。そこは山岳地帯で、山の間に一本の小道があり、両側は険しい山壁になっていました。伝説によると、関羽が馬に乗ってそこの谷間を飛び越えたことから名付けられました。

以上が今回「湖南こんなとこなんじょ」の内容です。湖南省の省都、「古城長沙」と親切でおもてなし好きの湖南人が皆さんをお待ちしています。湖南省での観光、グルメ、レジャーなどを思う存分にお楽しみください！

最後までお読みいただきありがとうございました。次回も湖南省のさらに面白くて新しい情報を詳しくご紹介しますので、ぜひご覧になってください。

[①]http://www.e3ol.com/picture/html/3/103/10526/3_103_10526.shtml